

平成21年 5月 1日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007 ～ 2008

課題番号：19720133

研究課題名 (和文) 注意配分が第2言語のリスニング理解に及ぼす影響に関する実験研究

研究課題名 (英文) The influence of attention to form in L2 listening comprehension

研究代表者

酒井 英樹 (SAKAI HIDEKI)

信州大学・教育学部・准教授

研究者番号：00334699

研究成果の概要：本研究では、意味と形式の注意配分が英語リスニングの意味理解に与える影響に関する実証研究を行った。形態素の数を数えながら聴解しようとする形態素群、文の数を数えながら聴解しようとする統語群、聴解だけに集中する統制群を比較した。その結果、文法形態素への注意配分は意味理解を阻害すること、また、文の数を数えさせるという統語的特徴への注意配分は文法形態素への注意配分ほど意味理解を阻害しないことが示された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1300,000	180,000	1480,000

研究分野：外国語教育

科研費の分科・細目：人文学・言語学・外国語教育

キーワード：英語教育学，リスニング，注意配分，第2言語習得

1. 研究開始当初の背景

第2言語習得理論において、目標言語を聞いたり読んだりして意味内容を理解するだけでなく、目標言語の形式的な特徴に気づくことが習得にとって必要であるという仮説が提案されている (Schmidt, 1990)。これを気づき仮説 (Noticing Hypothesis) という。この場合、目標言語の形式的な特徴というのは、どのように発音されるのか (音韻面)、どのような語彙項目が用いられるのか (語彙面)、どのような文法形態素が使われるのか (文法形態面)、どのように語彙項目が配列されるのか (統語面)、といった特徴のことを指す。たとえば、疑問文の統語規則を習得

するためには、疑問文を聞いたり読んだりして、その意味内容を理解するだけでなく、どのような語順になっているのかということに注意が向けられる必要がある。第2言語習得研究において、意味と形式に対する学習者の注意配分は重要な研究課題の一つになっている。

第2言語習得における注意配分の理論として、インプット処理理論 (VanPatten, 1996) が提案されている。インプット処理理論は、学習者が意味と形式の両方同時に注意を配分することは難しいと予測する。その上で、コミュニケーション上の価値 (Communicative Value) の低い形式への注意

配分は、Communicative Value の高い形式への注意配分よりも、意味理解を阻害している。

第2言語習得研究においては、形式的な特徴として、文法形態素を取り上げた研究 (VanPatten, 1990) が大多数を占め、その他の形式的な特徴を取り上げた研究はほとんどない。それで、本研究では、統語的特徴を取り上げて、第2言語習得研究における注意配分の実験的研究を行う。

2. 研究の目的

本研究プロジェクトは、大きく2つの研究内容 (第2言語習得研究における注意に関する理論的研究と意味と形式への注意配分が英語リスニングにおける内容理解に与える影響に関する実証的研究) から成り、その目的は次の通りである。

第一に、理論的研究として、第2言語習得における注意に関する研究を中心に資料を収集する。国内外で発表されている第2言語習得における注意に関する研究を文献や学会発表資料を通して収集し、分析し、理論的に整理する。

第二に、本研究では、大学生を対象にした実験を計画・実施する。形式的な特徴として、統語的特徴を取りあげる。これらの実験条件を整理しながら、意味と形式への注意配分が意味理解に与える影響を明らかにする。

3. 研究の方法

リスニング課題として、自由筆記再生法 (free written recall tasks) を取り上げた (Sakai, 2005, in press)。自由筆記再生法とは、英語の文章を聞き、その内容をできるだけ正確に、また多く日本語で書く課題である。リーディングやリスニング能力の評価方法として用いられてきているテスト方法である。この方法の採用理由は、VanPatten (1990) において用いられていることと、課題で用いられる文章の理解度を全般的に評価できることである。

実験の対象者は、87人の日本語話者である大学生であった。無作為に、-ing の数を数えながら聴解しようとする形態素群 (n = 30)、文の数を数えながら聴解しようとする統語群 (n = 28)、聴解だけに集中する統制群 (n = 29) に分けられた。

複数の参加者を対象にして同時に教室環境で実施した。参加者には、回答用紙及びそれぞれの群の課題が書かれたパッケージを配布した。そのパッケージを無作為に配布し、実験者にとっても、参加者にとっても、どの群に割り当てられるのかがわからないようにした。

リスニングの問題は、文を構成しない句だけの発話も含む対話2題と、複文を含む物語1題を選んだ。-ing と文の数がほぼ同じとなるように調整した結果、それぞれ12個と12文であった。

研究の手順は次の通りである。まず、各群の英語リスニング力の等質性を確認するために、英語検定2級のリスニング問題20項目が与えられた。

次に、実験課題の練習として、短い対話文を聞き取る自由筆記再生法が与えられた。1回目に英語を聞かせたときには、理解した内容をできるだけ正確に、多く日本語で書くように指示をした。2回目に英語を聞かせたときには、動詞の-ing 形の数を数えさせるように指示をし、その数を書かせた。このときに、動詞の-ing 形として、動名詞や分詞形が含まれることを確認した。さらに、同じ英文を聞かせ、文の数を数えさせ、その数を書かせた。文とは、「誰が何をするという主語と動詞を含む」ものであると説明し、主語や動詞を含まない句 (例、Janet. というような呼びかけや、Oh, really? のような句) は文として数えないことを確認した。これらの課題を通して、全員が、自由筆記再生法の方法と、文法形態素-ing の数え方と、文の数え方を練習した。

次に、全員が同じ課題を行うのではないことを説明してから、実験課題を実施した。英文は一度しか流れないこと、それぞれ対話文であるのか物語文であるのかということ、理解したことをできるだけ正確に、またたくさん日本語で書くこと、については、それぞれの英文を聞かせる前に確認をした。英文を聞いている際には、メモはとらないように指示をした。これは、意味内容の理解と、それぞれの課題 (形式への注意) に集中させるためであった。

最後に、参加者の背景情報に関する質問紙票が与えられた。さらに、形態素群と統語群には、リスニングのスキプトが与えられて、実際に自分が気づいた-ing 形と文に○をつけさせた。これは、参加者がそれぞれの実験課題を行っていたかを確認するためであった。

実験の実施は、研究の目的の説明からパッケージの回収まで、すべてを含めて40分程度であった。

分析方法は、次のとおりである。自由筆記再生法テストの採点はアイデアユニット分析 (Carrell, 1985) を用いた。まず英文をアイデアユニットに分割し、それぞれのアイデアユニットが再生されていれば1点を与えた。

それぞれのテスト結果について、信頼性とデータの正規性を検討した。次に、事前リスニングテストの結果に基づき、1要因分散分

析を実施し、各群の等質性を確認した。さらに、自由筆記再生法の結果に基づき、1 要因分散分析を実施し、各群のリスニング理解に差があるかどうかを検討した。

4. 研究成果

第2言語習得における注意配分の研究として、VanPatten (1990), Bransdorfer (1991), Baccouche, Castro, Messman, & Zakletska (1996), Wong (2001), Leow, Hsieh, & Moreno (2008) が発表されていた。その中では、文法形態素、語彙項目への注意配分が扱われており、統語的特徴への注意配分を扱っている研究はみられなかった。最近の Wong (2001) と Leow, Hsieh, & Moreno (2008) は、リーディングとリスニングという Modality の違いが、形式と意味の注意配分に与える影響を調べているが、統語的特徴を扱っていなかった。

本研究の主な結果は、(a) 文法形態素への注意配分は意味理解を阻害すること（すなわち、統制群 > 形態素群）、また、(b) 文の数を数えさせるという統語的特徴への注意配分は文法形態素への注意配分ほど意味理解を阻害しないこと（すなわち、統制群 = 統語群）が、統計的分析により示された。

前者の結果 (a) に関しては、先行研究で示されている結果（文法形態素への注意配分は意味内容の理解を大いに阻害すること）を支持するものである。-ing 形は、日本語話者学習者の多くは、英語学習の初期の段階で学ぶ形式である。現在・過去進行形、動名詞、分詞形は、中学校で扱われる文法項目となっている。この文法形態素への注意配分が意味理解を阻害したことは、インプットの量や明示的学習ではなく、この文法形態素の持つ Communicative Value の度合いが大きな要因であったことを示唆している。

後者の結果 (b) に関しては、文の数を数えるという統語群の条件が、意味内容の理解をそれほど阻害しなかった理由のひとつとして、文の数を数えるという課題が意味内容の理解と関係する可能性が挙げられた。文の数を数える際に、英文の主語や述語を把握していくことになる。主語や述語の把握は、「誰が・何が」「誰を・何を」「どうする・どうした」という意味内容の理解と関わっていたのではないかと推測された。すなわち、統語的特徴は意味理解の上で手掛かりとなるため、意味理解をあまり阻害しなかったと考えられる。VanPatten (1996) のインプット処理理論の妥当性が支持され、特に意味と形式の注意配分の効率は、形式の Communicative Value という要因が影響していることが示唆された。さらに、インタラクション中の意味交渉 (negotiation) に関する先行研究を

概観し、意味交渉は文法形態素よりも語彙や統語の習得により効果があるという指摘 (Pica, 1994) がされているが、気づきや注意配分の点から説明が可能であることを示唆している。

主な引用文献

- Baccouche, E., Castro, C., Messman, E., & Zakletska, L. (1996). *How comprehensible is input when attention is focused on form?* Paper presented at the Annual Meeting of the American Association for Applied Linguistics 1996 Conference, Chicago, IL. (ERIC Document Reproduction Service No. ED396532)
- Bransdorfer, R. L. (1991). *Communicative value and linguistic knowledge in second language input processing*. Unpublished doctoral dissertation, University of Illinois at Urbana-Champaign.
- Carrell, P. L. (1985). Facilitating ESL reading by teaching text structure. *TESOL Quarterly*, 19, 727-752.
- Leow, R., Hsieh, H-C., & Moreno, N. (2008). Attention to form and meaning revisited. *Language Learning*, 58, 665-695.
- Pica, T. (1994). Research on negotiation: What does it reveal about second-language learning conditions, processes, and outcomes? *Language Learning*, 44, 493-527.
- Sakai, H. (2005). An examination of free written recall tasks as listening comprehension tests. *JABAET Journal*, 9, 49-62.
- Sakai, H. (in press). Effects of repetition of exposure and proficiency level in L2 listening tests. *TESOL Quarterly*, 42(2).
- Schmidt, R. (1990). The role of consciousness in second language learning. *Applied Linguistics*, 13, 206-226.
- VanPatten, B. (1990). Attending to form and content in the input: An experiment in consciousness. *Studies in Second Language Acquisition*, 12, 287-301.
- VanPatten, B. (1996). *Input processing and grammar instruction: Theory and research*. Norwood, NJ: Ablex Publishing Corporation.
- Wong, W. (2001). Modality and attention to meaning and form in the input.

*Studies in Second Language
Acquisition, 23, 345-368.*

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 1 件)

- ① 酒井英樹, 形式と意味への注意配分が第 2 言語のリスニング理解に及ぼす影響, 第 39 回中部地区英語教育学会静岡大会, 2009 年 6 月 28 日, 静岡・常葉学園大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

酒井 英樹 (SAKAI HIDEKI)
信州大学・教育学部・准教授
研究者番号: 00334699

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者